令和8年度 附属池田中学校 研究総論

～未知の文脈へ学びを転移させる「思考力」の育成～

はじめに

令和8年度より附属池田中学校では，予測困難な時代（VUCA・BANI）を生き抜くために不可欠な「思考力」の育成に重点を置き，3カ年の教育研究を推進する。これは池田地区の目標「グローバル社会を協働的に創造する資質・能力の育成」と，本校の教育目標「自主・自律の精神」を達成する根幹の取り組みである。昨今の附中生は「効率的に正解を出すこと」には長けているが，その力が特定の教科や場面に閉じてしまっている。未知の課題に対し自ら問いを立て，試行錯誤する「思考」への弱さが課題であり，この「効率至上主義」から脱却することが急務である。そこで本研究では，「未知の文脈へ学びを転移させる『思考力』の育成 」をテーマに掲げる。生徒自らが社会課題を発見し，原因を深く追究して主体的に行動できる人の育成を目指す。

第1章：研究の背景と課題意識

1-1. 全体目標と本校の基盤

池田地区の共通目標「グローバル社会を協働的に創造する資質・能力の育成」を達成するため，本校は「自主・自律の精神」を土台とし，「行動力」「思考力」「協働性」の3本柱を定義している。これらは単独ではなく，「深い思考」を持ち，「他者と協働」しながら新しい価値を生む「行動」を起こすという連動して働く力である。

1-2. 生徒の現状と「本当の課題」

2025年末のアンケート等から，生徒はプロセスを軽視し「効率的な正解への到達」を最優先する傾向が強いことが判明した。「思考力が特定の教科に閉じてしまっていて，他の文脈に転移しにくいこと」が課題であると考える。調べればすぐ答えが出る環境に慣れ，想定外の状況に直面すると自ら問いを立てて追究する力が失われることが懸念される。

1-3. 予測困難な時代における思考の必要性

AIが急速に発展し，正解のない予測困難な現代においては，知識の再生や「1つの正解を早く見つける」力だけでは立ち行かない。特定の場面に閉じていた力を未知の領域へとつなげ，多角的な視点から本質を見極める「探究的な深い思考力」を育成することが必要である。

第2章：研究テーマと目指す生徒像（生きる力としての思考力）

2-1. 本年度の中学校の研究テーマ

主題：未知の文脈へ学びを転移させる「思考力」の育成

2-2. 目指す生徒像と「思考力」の定義

アントレプレナーシップ教育の目的は，起業家の育成ではなく「自ら価値を創り出していく力」の育成である。そこで，本校が目指す「生きる力としての思考力」を以下のように定義する。

「生きる力としての思考力」とは，事象や物事を多面的・多角的に捉えて情報を分析・分類し，批判的思考をもって本質を見抜いた上で，自らの経験や知識との類似点を結合させて目の前の課題に当てはめ，さらにその解決のプロセスを全く別の場面にも応用（転移）していく，総合的かつ実践的な課題解決能力である。

2-3. 思考法ー思考のエンジン「PDCA × OODA」のハイブリッド思考

予測困難な時代においては，事前に立てた計画を遂行するだけでは想定外の事態に対応できない。そのため，中長期的な指針としてのPDCAにより方向性を維持しつつ，刻々と変化する状況に即応するOODAを高速で回転させることで，柔軟かつ本質的な課題解決が可能となる。

- **PDCAサイクル（マクロ的指針）：**目標達成に向けた継続的な質・プロセスの改善サイクル。
  - **Plan（計画）：**目的を定義し，具体的かつ論理的な行動計画を策定する。
  - **Do（試行）：**計画に基づき実践活動を行う。
  - **Check（検証）：**行動の結果を客観的・多角的な指標に基づき評価する。
  - **Act（再構築）：**検証結果を反映し，次期計画に向けたシステムや行動の改善を行う。
- **OODAループ（ミクロ的機動力）：**不確実性の高い環境下における即時的な意思決定と行動のプロセス。
  - **Observe（観察）：**対象を多面的に捉え，生の情報を収集・抽出する。
  - **Orient（情勢判断）：**批判的思考により本質を見抜き，既有知識と結合させて抽象化・構造化する。
  - **Decide（意思決定）：**抽象化した概念を現実に適用し，最適な解決策を採択する。
  - **Act & Transfer（実行と転移）：**解決策を遂行し，そのプロセスを別の未知なる文脈へ応用（転移）させる。

第3章：3カ年研究ロードマップ（R8〜R10の全体像）

「学びの転移」を実現するため，以下の3カ年を段階的な成長プロセスとして設計する。

- **1年目（R8年度：定義期）：**「泰山モデル（19の思考スキル）」を導入して思考力を共通言語化。各教科で重点スキルを選定し，授業内で意識化（メタ認知）させる指導の土壌を築く。
- **2年目（R9年度：発揮期）：** 教科で鍛え上げた思考の「型」を，総合学習（EQ）や実社会の課題解決といった未知の文脈へと応用・発揮させる「学びの転移」を学校活動全体へ本格実装する。
- **3年目（R10年度：評価期）：** 定量・定性データやAI分析を用いて生徒の変容を多角的に検証し，生徒が「実力ある探究人」へ成長したかを見取る教育モデルを評価，検討する。

第4章：R8年度の実践システム（教科教育への落とし込み）

4-1.「泰山モデル」による共通言語化

本研究では，中京大学の泰山裕教授が提唱する「思考スキル体系」を導入する。これは，抽象的な「思考力」を比較・分類・推論といった「学習・指導可能な単位」まで分解した19の思考スキルで構成される。これらを中学校の共通言語とすることで，思考プロセスの可視化と解像度の向上を図る。

教科	教科で特に育みたい思考力（定義）	選んだ思考スキル ランキング上位
国語	理解 ▼複数の情報や考えを比較する視点を持ちながら，言葉・表現・構成・文脈を手がかりに，文章の内容を理解した上で，書き手や話し手の意図，立場，価値観を捉える力。 表現 ▼自分の考えを形成する際に，根拠の妥当性を確かめ，相手や目的に応じて表現を選び，筋道立てて組み立てる力。	＜理解＞ 1.多面的に捉える 2.変化を捉える 3.関係付ける ＜表現＞ 1.見通す 2.構造化する 3.評価する
数学	・論理的思考力（筋道を立てて考える力，根拠） ・数学として捉える（一般化，抽象化，モデル化，数値化） ・分野の統合・手法の選択と結合（帰納的・演繹的），批判的思考	関数 1 変化と 2 表現 3 変換 4 特性比較 幾何 1 多面的 2 理由づけ 3 変化 4 焦点化＆見通す データ 1 特定2 理由づけ 3 要約 4 比較＆ 変換 代数 1 抽象化 2 変換 3 分類 4 構造化＆ 特定
理科	・科学的な根拠に基づいて選択する力 ・責任をもって判断する力	①多面的に捉える　④比較する ⑧関係づける　⑨抽象化する
社会	・社会課題について自分事としてとらえ多面的，多角的に考察する力 ・自分なりに社会のあり方を判断し，平和を作ろうとする力	①多面的にみる　②焦点化する　③理由づける　④評価する ⑤比較する　⑥関係づける　⑦変化を捉える　⑧広げてみる
英語	相手の状況や意図を理解し，自分の考えを状況に合わせて伝える力	①要約する　②多面的にとらえる　③理由づける ④構造化する　⑤関連付ける　⑥比較する　⑦具体化する ⑧推論する
音楽	・仲間の演奏を聞いて自身の演奏を振り返る　メタ認知力の育成 ・仲間の良さを聞いて自身の良さを気付く　寛容な心の育成 ・客観的な演奏や音楽を参考にし自身の成長につなげる ・様々な作曲家達が残した作品から人間の生き方までについて深める	①多面的に捉える　②変化を捉える　③比較する ④関係付ける　⑤関連付ける　⑥理由づける ⑦焦点化する　⑧評価する　⑨広げてみる　⑩要約する
美術	・自らの考えや思いを表現する力 ・課題を見つけ探求する力 ・表現をツールとして他者とつながる力	6 変換する　10 要約する 11 抽象化する　8 関連付ける 1 多面的にとらえる　9 理由づける
体育	・パフォーマンス改善に向けた計画を立てる力 ・自分の課題を改善するための方策を提案し，説明する力 ・仲間間と で建設しあいコミュニケーションをとる力	③順序立てる　④比較する　②変化を捉える ⑥変換する ⑦関連付ける　⑧推論する　①具体化する
技術・家庭科	生活や社会の中から問題を見いだして課題を設定し，解決策を構想，実践を評価・改善し，考察したことを論理的に表現するなど，これからの生活を創造して課題を解決する力	1 多面的に捉える　4 比較する　2 変換する　8 関連付ける　9 理由づける　10 見通す　13 評価する 14 広げてみる　15 立てて決める　11 要約する



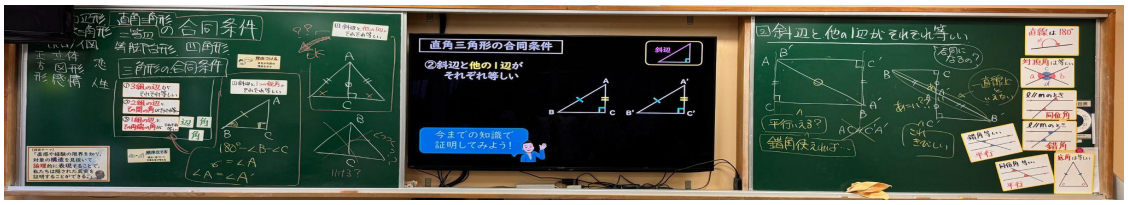
4-2. 各教科における「重点スキル」の選定（ローカライズ）

教員と生徒の認知負荷を軽減するため，各教科の特性に応じて育成すべき「重点スキル（5〜10個程度）」を泰山モデルの19のスキルの中から選定し，ランキング化を行う。これを「緑の学び舎」へ反映させ，教科目標と思考力育成を構造的に統合する。

4-3. 授業におけるスキルの明示と意識化

授業冒頭で「本日は『〇〇する』思考スキルを活用する」と明示し，生徒に「どのスキルを選択しているか」を意識させる。授業後には振り返りシートによるリフレクションを行い，スキルの発揮状況を自覚させるメタ認知のルーティンを確立する。





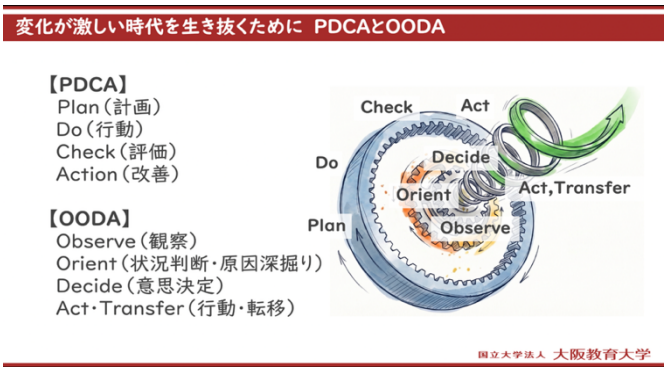
4-4. 教科会議の進化（実践知の共有プラットフォーム化）

週1回の「教科会議」において，実践事例（板書，生徒の変容，記述等）をスライド形式で共有する。「実践の報告」に留まらず，「対象のスキルが真に発揮されたか」という観点からピアチェックを行い，組織的な実践知の蓄積を図る。

第5章：総合学習（探究カリキュラム）との構造的統合

各教科で鍛えた思考の「型」を，複雑な課題解決を目的とする総合学習で試行錯誤しながら「使う」という往還的な学びこそが，思考力を未知の文脈へと繋ぐ「学びの転移」を生成する。

- **第1学年：気づきと導入（クエスト神戸 ／ アントレ@わが町自慢）**
  身近な事象を多角的に観察する。活動後の「振り返り」において，「なぜその課題が起きているのか」という根本原因への着眼点を導入し，次学年での「深い探究」への種蒔きを行う。
- **第2学年：深化と発揮（クエスト京都 ／ アントレ@起業体験）**
  広い視野で社会を捉え，社会課題の「原因の深掘り」を本格化させる。批判的思考で本質的な問題を見抜き，限られたリソース内でアイデアを形にして最適解を意思決定する訓練を行う。
- **第3学年：自走と変革（アントレプレナーシップクエスト［EQ］）**
  3年間の集大成である。教員（SV）は伴走支援に徹し，生徒自身がプロジェクトの全体計画（PDCA）を策定する。その枠組みの中で，状況変化に応じ自律的にOODAループを回して「自走」し，獲得した学びを実社会へ転移させる姿を最終ゴールとする。



第6章：多面的な検証体制と今後の展望

6-1. 三位一体の評価・検証指標

思考力は単一の定量的テストでは測定困難であるため，以下の多角的な検証体制を構築する。

1. **定性的指標：** 泰山モデルのスキル定着度を問う生徒の自己評価アンケート。
2. **教員の見取り：** 実際の授業やEQの文脈で，思考スキルがどう発揮され「転移」したかをOPPシートの記述や活動プロセスから丁寧に見取る。

6-2. 組織としての展望

SV面談や教科会議を通じて，教員自身が生徒の微細な予兆（思考の停滞等）を「思考の停滞」として構造的に分析・診断する専門性を養う。教員同士が「生徒の思考力がどのように変容したか，身についたか」を議論し，刺激し合う「探究的組織文化」を醸成する。

おわりに

予測困難な時代において，既知の正解に安住する姿勢は変革への適応力を阻害する。本校の「自主・自律の精神」を実践的能力へと昇華させるためには，特定の教科といった文脈に束縛されていた「思考力」を解放する「学びの転移」が不可欠である。これから開始する3カ年の研究を通じ，教員は生徒を「知識の消費者」から，論理的根拠を以て社会を切り拓く「価値の創造者」へと導く。全教職員が一丸となり，自らも探究を継続する専門家集団として，新たな教育実践を創造する。

【参考文献】

- 泰山裕 著『思考スキル・思考ツールで実現する「深い学び」の授業デザイン 教科×プログラミングが生み出す21世紀の教育』（東洋館出版社）